





令和3年 No.77



宗教法人 慈恵院 付属多摩犬猫霊園



無 阿 弥陀 教正天龍滴水 佛

さを示す。が、全体に若いという感は、否めない。とくに「南」に気負いと 間が気合にのり、豁達な禅機が明澄な墨気を呈し、力と大きさと自由 「佛」に不安定さが目立つ。 意気軒昂、溌刺颯爽、まことに小気味よい。ことに「無阿弥陀」の中

これは五十歳代前半の作であろう。 落款は、一段と冴え気脈貫通するが、ゆったりとした趣には欠けよう。 「大教正」となるのは、明治五年・五十一歳の時であるから、おそらく

> 水が 直ぎ 牧ぼ

明治四年、 天龍寺管長となった。

禅画報」より

滴 t (一八二三~一八九九)

八

拙き

堂賞

如に

雲え

臨済僧という。紫笛、懐珠とも称した。

(生没年不詳)

狂 歌 で 説 法

したと伝えられ 拙 堂 和 尚 は ている。一 臨 済 下 0) 一夜、夢 褝 僧 で で紫 明 和 玉 0) 0 末 笛 年 を 拾 大 うた 阪 で 0) 寂

見て、それ以

来

み

ず

か

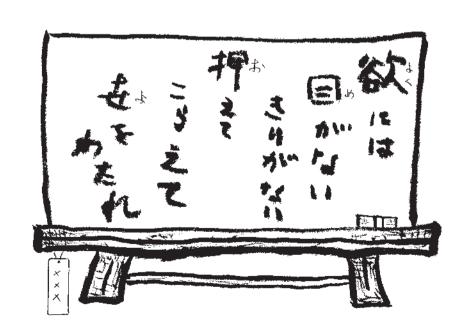
5

紫笛老人と号した。

すことが多かった。その一つ二つをあげると、 0) 拙 堂 狂 は 歌 そ 無 0) 心 狂 抄 歌 で 有 が あ 名 る。 で、 人 み が ず 訪 か ね 5 て来ると、 0) 歌 を 集 歌 め で示 た Ł

すべきことかたつける気は 百 のうそを上手にならべても せずにおく 誠 ひとつにかなわざり 気はいつも苦しむ 善処な t) it 1)

禅門逸話集成」より



蕬

わせてくれました。

普通

素が六十五

一になっ

たら



あと十九年は生きるぞ 稲田 武士

ら、 を取 以下なら大変といってい と女房は云っていました。 酸素吸入をしようとした 酸素 "八十五 "とかいって ました。 て逝ってもう一年 女房が三匹 「そんなのいらない」 きてもらったとき 女房が吐血して救急 り八十一になりまし コロナ騒ぎで九十三 私も一つ"とし の犬を残し -がすぎ 酸

"六十五"になってい 入 再 でかけつけました。 呼びだされ、 べっていました。 院。 び 度 それでも平気で 退 夜 院 あ 中 くる てきま 吐 息子と二人 日 ĺП. 病 た 院 た ま 0) 酸 か 5 Þ

さらばじゃ」と云って笑 そしてなんと「みなの者 りがとうござい もらって楽しかった。 お金をいっぱい使わ まし た。 せ あ 7

死 < は とのこと。 ほとんど意識 たがその通りでした。 な 生あるも 死ぬなんて少しもこわ ぬ " (7) い」と云ってい 兀 だと悟 0) 犬を 0 生前から は が ŋ かならず みとり、 なくなる を開 「私

ますが、

八十五でも平気 っていました。

Þ ベ

> に「在原業平」辞 小説 うか た私 歌がありました。 7 さて女房に先をこされ たのか なと思 は なん 伊 勢物語「業 ていって死 っていたら、 世 平

ついに行く 道とはかねて 聞きしかど

昨 日今日とは

が、 七四 ざ ないぞー!!と云い 紙に書いて額に入 L ことにしました。 ました。この詩 ح 0 あ 号に九十までは れを頂戴することに 思はざりしを 7 と十 あ ŋ ·九年、 ´ます。 ま れ 歌 生 を色 逝 7 た 恵 か か

文 集

ペットとの思 必ずご記入下さい。 出 てお寄せ下さい。 (800字以内) [来事など作文に 作文には題名を い 出

しま 応募作品は返却 ŧ (1 た

お送り 住 い 掲載は随時とさせ 電話を明記 慈恵院編集部 所 ただきます。 下さい。 て

氏名 年 齢 蕬

王

切 仕

開

ワ

事上、

獣医さん

帝

で

毎週通

0

す

が

41

る

獣 で 0

医

さん

0

ば

11

で 0) 9 間

獣

医

<u>ځ</u>

h

動物との 昭島市 距 離 感

代 表 **アリエル** ペットショップ 大川

が、 ら自 11 生 ます。 る 活 は、 事 動 粛 彐 物 が 生 コロ ツ ブリー 活 プを営 あ 13 変 ナに . が 始 ŋ b Í 影 7 ダー おり な 響 ま $\overline{\lambda}$ た ŋ で 9 とペ が てか Í 0) 出 人 お 7 ツ

お 話させて頂きます。

クチン接 急 等 てお 待 位. 事 合 通 経 が 態宣 室 休 ります 9 9 種 が 7 2 7 常 な b 合 様 過ぎて疲 変 ん がです。 î も上 0 **√**° ッ 7 **|** 労 لح が

で会社、

学 0)

校 緊

昨

年

7

2週

お 密 ŋ 齢 ま 室 な 0 若 を 5 た。 な 用 11 子 意 が 様 L . 多く Þ 7 猫 < 外 達 れ 13 嘔 7

ら、 話 家 な に 7 る b で 吐 年 11 す。 ï 多く P 族 0) 出 0 9 41 E E る は をさせて か 下 7 ほ 犬や猫 とんど なら、 間 家 自 11 不 同 私 痢などが多か -思議 13 一粛に て、 いろ \$ 症 何 11 頂 でこ 原 達 る な 子 両 0) L 状 因だ を 供 な方 生 親 方 思 0) 9 11 活 7 は 7 子 か は が 13 学 普 とお 9 ま 13 か 仕 待 が な 9 1 急 校 事 段 た た 0

さ とても大切です。 て行くには、 手に付き合っ 上 手 < 距 て下 付 離 咸 き

2

月

当山行事	
二十四節気	
祝日等	

ょ

み

L				· · · ·		· — • • •	
	涅 涅 槃 13 会		修正会		12 除夜の鐘	成 道 会	当山行事
	●薩埵富士雪縞あらき 2/9 雨 水	2/4 立 春 単ごよみ (山口青邨)	●大寒の入日野の池を 1/20 だい かん 大寒の入日野の池を	1/5 一握 (井上静川)1/5 小寒	●門前の小家もあそぶ 冬至かな(凡兆)	●大雪や茎ばかり掃く 藤 落 葉 (涙人)	二十四節気
	2 / 23	2 2 / / / / / / / / 3 節 分	1 / 10	1 / 7			祝
		建 節 分記念	,10 成 人 の 日	(七草) 人日の節 句			
: [生日	記 念 	日	ン 節 句 			等

1

月

12

月

お

ど

わ

動

物

病

院

は

令

和

ょう

皆さま

W

か

が

お

過ごし

な

0

7

ま

ŋ

朝

晩

だ



h だ ましたが、 ん لح 寒 < 世 話 をする覚 悟 で お

13 ŋ しました。 は 大 きな 問 幸い 題も 足 なく、 以 外

した。

順 なってくれました。 調 13 すく すく大きく

真 を 病 載 院 せて 0) ブ 口 41 ると、 グなどで 患 者 写

入りま

そ

0)

春

先

に、

生

ま

れ

7

3

年

0

春

13

開

院

2

年

目

き ? ! てい さまか きました。 ただく機 などと 5 あ 会が お 0) こは 声 増 を えて げ か け

とぎや おうち キ 0 ヤ 猫 ツ 1 ち 夕 Þ ワ L 0) を 爪

た方

連

れ

7

帰

る

İ

信

が

ない

とのこと。

当

院

で

お

くださる方、

来

院

0)

度に

を少しずつ、

ひとつずつ

1

き足

が

不

自

由

で、

保

護

た

が、

ひ

と

ŋ

は

生

ま

れ

0

ま

Ū

た。

きょ

うだ

41

で

L

間

b

な

11

子

猫

が

保

護

され

は足 とお 遊 る方も 家 0) リハビリにな で預かってくださ れ ば

にも 方が も良 新 11 41 と仰 て、 41 そ 家 族 0) 猫 が ち 出 来 ゃ ま ん

預

か

7 L 言が発出された日でした。 た 日 お ざ 0) が わ 最 令 動 初 0 和 物 緊 2 病 急 年 院 事 0 が 態宣 4 月

況 で経 私も 0) 中 験 皆さまと したことの 不安を感じ 同 様 な 13 今ま 0 13 状 0

た。 そ 毎 0) 日 中 を過ごしてきま で 今

Ł

んでくださる方、 ました。 中 iz に くと 積 用 Zx ま 暖 重 れ、 ね か 4 てきたら、 今 地 0 域 病 0

13 お家に ってくださる 迎 え 7 で、 ると思 わ 13 か な 先 5 が 何 9 てい をしたら良 見えな なくなること e V ます。 まし 4 そ 状

そ

0)

中

況

0

中

41

0

か

開 院 で自 今 と感じています。 し つくも 出 0 然 来 か と良 0 ることをやる ŋ لح な 地 0 (V 結 で に 果に は 足 を な 結 9 13 け

ます 見 健 えなな P まだま が、 か だ終 皆さまもどうぞ お過ごしくださ コ 口 ナ 息 禍 0 13 兆 あ し が

出 る 13

> が相 奕 みてば 時 じけめやも

b

あ

0

時

は

気

皆

さま

院

0

姿